

世紀末ノルウェーとイブセン

毛利三彌

(一) ノールカップ旅行

一八九一年七月初め、イブセンはその頃住んでいたミンヘンを發つて北に向かった。妻のササンナはノルウェーの親戚を訪ねるつもりだったが、イブセンはそこまで同伴するかどうか決めかねていた。今年は旅行が多くて疲れたから、デンマークの海岸町でゆつくりできたらいいと思ふと友人に書き送っている。しかし、結局この北旅行は一八六四年以来の「自己亡命」とも言うべき外国生活で三度目のノルウェー訪問となった。

七月十六日、S・S・メルキオール号に乗ったイブセンが首都クリスチアニア(現オスロ)の港に着く。今や世界的な作家である彼に右翼紙も左翼紙もこぞって歓迎の意を表わした。ところが彼は一、二日の滞在のみですぐにノールカップへの旅に出る。妻は同道しなかった。彼女は前に行つたことがあり、しかも今リュウマチに悩んでいたからだといふ。

ノルウェー北部のフィンマルク地方にあるノールカップは、北緯七十一度十一分、東経二十五度四十八分に位置するヨーロッパ最北端の岬として知られる。北極海にのぞむ数十メートルの断崖の上はかなりの広さの平地になってお

り、夏には、海に浮かぶ真夜中の太陽を眺めるために世界中から観光客が押し寄せてくる。現在は、やや南に下がったヘニングススヴォグという港町まで船か飛行機で行き、そこからノールカップまで約三十分バスに乗る。昔は、船がノールカップの断崖の下に碇泊して、船上から眺めるか、崖を登って上陸するかしたらしい。イブセンは前者を選んだ。

ノールカップ旅行についてのイブセンの感想は何も残っていない。なぜこの旅を思い立ったかもわからない。しかし、晩年作品の執筆に直接先行する「真夜中の太陽」経験がイブセンに何の影響も与えなかったはずはないだろう。

ノルウェーの研究者は誰も言わないけれども、少なくとも翌年に書かれる『棟梁ソルネス』とは何らかの繋がりがあるのではないか、晩年作品を論じる前にどうしても一度ノールカップに立ってみなければならぬ、かねがね私はそう思い込んでいた。そして、イブセンに遅れること百年近く、ようやくその思いを果たした。一九八七年九月初旬のことである。

ところで、ノルウェーは世界で一番美しい国の一つだと、あるアメリカの職業旅行者が話すのを聞いたことがある。山とフィヨルド、白樺林に囲まれた湖、お伽の国のよ

うな色とりどりの家々、だが冬の厳しい自然——。自然と文学を結びつけるのが習性になっている我々日本人は、イブセンのドラマはこの国の風土と緊密な関係があるに違いないと考える。しかし、一口にノルウェーと言っても南と北では大違いである。ノルウェーの首都オスロに中心点をおいてノールカップまでの距離を半径にした円を描くと、下はローマまで入る。それくらいにノルウェーは南北に長い。

私は、オスロから飛行機で北緯六十九度四十分のトロムソエーまで飛び、ここでベルゲンから航行してきた観光船に乗った。このあたりの山々はのこぎりの歯のような頂きを連ね、オスロ周辺のなだらかな山並みからは想像もつかない近寄り難さをみせている。飛行機から見下ろすと、あの豊かな森や林はどこに行ってしまったのかと思うくらいに緑がない。ただの岩山である。ところが、ベルゲンから八日間かかるノールカップ船旅の最後の二日だけをいわば掴み食いした私は、海辺からいきなりそり立つ山の形が次第に台形をなしてくるのに気づかされた。ノールカップまで来ると、もう木は全くない。

九月では白夜の季節から遠くはずれている。バスの定期

便も八月中旬でなくなると聞いていた。ところが幸いなことに、船の観光客のためだけへニングスヴォグからバスが仕立てられた。白夜がないだけ観光客の少ないのが何よりだった。それに、初秋といってもここがイブセンの来たノールカップであることに変わりはないのだ。

船がヘニングスヴォグの港に着いたのは午前九時半頃。

案内人も驚くほどの上天気で、外は予想より遙かに暖かだった。ノールカップの断崖上はさすがに風が冷たく、ヤッケで身を固めて立ったが、眼前に広がる北極海の眺望には別に何があるでもないのに、ここが北の果てだと思ふと、その海の輝きに何とも言えない感慨が湧き起こってくる。私はただ、素晴らしい素晴らしいと眩きつづけていた。

まぎれもなくあの海の上でイブセンは一晚を過ごしたのだ。

私はできるかぎりイブセンの感情に我が心を同化させようとした。つまり『棟梁ソルネス』以降の作品から私が受けとる感情と自分の今の思いとを重ね合わせようと努力した。だが、所詮、二つは別ものでしかなかった。ここには、晩年作品に含まれる自己の奥底へと沈み込む垂直的な

意識を起こさせるものは何もない。眼下の海はあくまで無限に広がり、そのきらきらした波頭は海面下に何事をも隠しているようにはみえない。むしろイブセンは、『社会の柱』以来の中期問題劇がもっていた水平性——水辺の平地が都市に舞台が設定され、その問題は社会に向かって普遍的に広がって行く——を、水平線上に浮かぶ太陽とともにこの北海の潮に洗い流してしまったのではないかとさえ感じられた。このあとの作品は、『小さなエイヨルフ』を唯一の可能な例外として、すべて海ではなく山のイメージに支配されるのである。

我々がノールカップを後にしたのは十二時半頃。船は一時間後に出発して最終目的地のヒルケネスに向かった。そこまでもう一晚の旅である。長旅のクライマックスを経験したからか、船内にはなんとなく浮き浮きした雰囲気があった。日が暮れると、真っ黒い海のほかは何もみえなくなる。ただの無、無限の無。そんな世界を、オーストリアとイギリスから来たという団体の観光客は甲板にただ黙って立って眺めつづけていた。

翌朝早くに、ソヴィエトとの国境の町ヒルケネスに着いた。このあたりは再び灌木の茂みに覆われている。すでに

かなり南に下っているからだろう。何の変哲もないただの
囲い杭がたっているだけの、しかしソヴィエトからの脱出
はまず不可能だという監視の厳しさがあるらしい国境線を見
物したあと、もう一週間かけてベルゲンに戻る他の船客
を、私は寂寥とした棧橋で見送った。下船したのは私だけ
だった。ろくに話をしたわけでもないのに、全員が甲板に
出て手を振っていた。

私はヒルケネスから再び飛行機でオスロに戻った。ほん
の数時間である。典型的な「忙し屋日本人」の何とも横着
なノールカップ旅行であった。(それでも、あの観光船に
は、私以外に日本人はただの一人もいなかった。) イブセ
ンの場合は、クリスチアニアから二十日間近くかかった船
旅の往復である。私が彼の気持ちを推し量ろうというの
が、そもそもおこがましい。しかし、一つだけ、私は晩年
のイブセンの心をのぞいた気がしてわずかに納得した。そ
れはノルウェーという国に住む人間の「孤独」ということ
である。

船で北に登って行くと、岩山の裾野に、海の水に今にも
洗い流されてしまいそうな、ぼつりと一軒だけ立つ家がと
きどきみえてくる。このような人里離れた所に住みつくに

はそれだけの理由があるのだろう。それにしても彼らはこ
の海と山だけに囲まれた毎日をどのように過ごしているの
か。魚をとり、わずかな畑を耕しているとしても、一日が
終わって家の前の石に腰掛けるとき、彼らは何を眺め何を
考えるのか。自然の「孤独」。これはノルウェー中部、南
部の山や湖を前にしてつい我々が抱いてしまう感傷とは全
く無縁である。ここでは、ビョルンソンの『日向が丘の少
女』のような農民小説の世界は成立しない。

イブセンの作品は徹底して感傷を排する。それが、イブ
セン亜流作家との決定的な相違だと言える。だが、晩年の
作品にみられる孤独感、特に夫婦のそれぞれの心に住みつ
いている孤独感は、他の人間とのいかなる繋がりをも拒否
された、そのままではとうてい耐え難い荒野の生活を思わ
せる。人は生涯フィヨルドを前にして佇んでいることはで
きない。イブセンは、北旅行の間、様々に形を変える山と
海を眺めながら、自らの孤独の克服を思いつづけたのでは
なかったか。男としての、夫としての、芸術家としての孤
独。夫人が同伴しなかったことは瞑想には幸いだったかも
しれない。

イブセンが首都クリスチアニアに戻ったのは八月七日で

あつた。そのあと十日間を町一番のグラント・ホテルで過ごし、八月十七日に王宮の近くのヴィクトリア・テラッセ7Bのアパートメントを借りた。この時点でイブセンは、このまま冬を越すことを決めたようである。だが、まだ定住するところまで気持ちがあつてはなかつた。それが結局は、長かつた外国生活に終止符を打つ結果になるのだが、この二十七年ぶりのノルウェーの冬を迎える決心は何に原因するのであるか。これまで常にイブセンに敵対的だつた保守派までが彼を大作家として丁重にもてなしたことが第一の理由のように言われる。それに間違ひはないだろうが、別のわけはなかつたのであろうか。ともあれ、このあとイブセンのまわりには何人かの若い女性が登場するのである。

(二) イブセン周辺の女たち

イブセンは六十歳を過ぎるまで、十八歳のときの私生児をつくつた出来ごとをのぞけば、妻以外の女性と特別なかわりをもつたことは一度もなかつた。少なくとも知られているかぎりではそうである。ところが六十歳を越えた途

端に、イブセン周辺に何人かの若い女性が現われる。

最初は、ヴィーン社交界の十八歳の娘エミリー・バルダッハである。彼女に出会つたのは一八八九年の夏、つまり『ヘッダ・ガブラー』執筆の一年前で、チロルの避暑地ゴッセンザスにおいてだつた。その秋、ミュンヘンの住まいに戻つたイブセンは、どうみても特殊な感情が込められているとしか思えない手紙をヴィーンのエミリー宛てに頻繁に送る。二人の仲を世間が知るのはイブセン没後のことだが、彼女から託されてエミリー宛てのイブセンの手紙を公にしたデンマークの批評家ゲオア・ブランデスは、それらを読んで、かつて自分がイブセンからもらった手紙の内容を思い出した。一八九五年二月十一日付けのその手紙の中で、イブセンはブランデスから送られた論文「ゲーテとマリアンネ・フォン・ヴィレマー」の礼を述べたあと、次のように書いていた。

その頃のゲーテの、青春が蘇つたような作風を思いやるとき、このマリアンネ・フォン・ヴィレマーとの出会いが、彼にはどんなに素晴らしいことだつたか、どんなに祝福されたことだつたかと考えないわけにはい

かない。ときには、運命とか、偶然とか、摂理とかい
うものが人に微笑みかけることも本⁽⁴⁾当にある。

ゲーテは三十歳のマリアンネに出会ったとき、すでに六十
五歳だった。この手紙を書きながらイブセンは自らとエミ
ーリエとのことを考えていたのだろう。そして、故国での第
一作『棟梁ソルネス』に現われる小悪魔的な娘ヒルデのモ
デルはエミリーリエだったのだと、ブランドスは納得した。

ところが、晩年のイブセンの若い女性への関心は、エミ
ーリエ一人にかぎられていたわけではなかった。

まず画家志望の二十三歳のヘレーネ・ラフがいた。彼女
とは、エミリーリエと同じチロルの避暑地で知り合い、とも
にミュンヘンに住んでいたからあとあとまで親しくつき合
った。

ノルウェーに戻ってまもなく親密な交際相手になったの
は二十七歳のピアニスト、ヒルドゥール・アンネルセンで
あった。彼女は、イブセンがかつてベルゲンで舞台監督を
勤めていたときの下宿の女主人ヘレーネ・ソントウム夫人
の孫だったから、以前から全く知らない間柄ではなかった
だろう。ヒルドゥールの従兄のクリスチアン・ソントウム

博士は、ノルウェー帰国後のイブセンの家庭医になった人
である。

もう一人手紙のやり取りがあつたのはスウェーデンの二
十六歳の女性、ローサ・フィーディングホフである。一八
九八年三月二十日のイブセンの七十歳の誕生日は北欧中で
祝われたが、ストックホルムに招かれた際に彼女と出会っ
たらしい。イブセンがノルウェーに戻つたのは四月十七日
で、その八日後に、ローサからの手紙の返事として絵葉書
と自分の写真を送っている。六月と七月にも手紙を書いた。

この三人のほかにも、イブセンは友人の小説家ヨナス・
リーの娘で女優のヨハンネや彼女が紹介した娘と付き合っ
ていたと言われる。

そして、晩年のイブセンの心を揺るがす一人の女性が、
帰国した彼の前に現われる。もう若くはないが、かつて
『人形の家』のノーラのモデルと言われたラウラ・キェラ
ーである。彼女はクリスチアニアに落ち着いたイブセンの
ところに来て、『人形の家』のモデルとみられたお
陰で一生がめっちゃめっちゃになったことを訴えた。イブセン
は返す言葉もなかったという。ラウラの姿は、最後作『私
たち死んだものが目覚めたら』の、彫刻家ルーベックのか

つてのモデル、イレーネに反映されているとみる批評家もいる。⁽⁵⁾

序に言えば、もう一人過去からの亡霊のような女性がいる。イギリスの伝記作者マイケル・メイヤーによると、一八九二年六月、首都から南に百マイルの所で、ある七十四歳の盲目の貧しい女が死んだ。彼女の名はエルセ・ソフィ・イェンスタッテル。四十六年前にイブセンの私生児を生んだ女である。イブセンは知らなかっただろうとメイヤーは言うが、二人の子であるハンス・ヤコブ・ヘンリクセンは、世界的な大作家となった父のところに、この頃物乞いに来た形跡がある。かつて私がイブセンの故郷シェーエンを訪れたとき、この地のイブセン研究家エイナル・エストヴェットが面白そうに話してくれたのだが、私生児の存在は当時から公然の秘密で、あるときハンス・ヤコブは父のアパートメントの扉を叩き小遣いをせびった。イブセンは黙って金を渡し扉を閉めたという。真偽のほどはわからないが、あっても不思議ではないだろう。

また、新しく家族の一員となった、息子シーグルの伴侶ベルグリオットもいる。ベルグリオットは、青年期以来の僚友ビョルンスタアルネ・ビョルンソンの娘で、このとき

二十三歳だった。イブセンのビョルンソンへの感情はこれまでかなり起伏のあるものだったし、このときもあまりいいものではなかったから、息子の結婚に諸手をあげて賛成したわけではなかった。結婚式はアウレスタのビョルンソンの館で行なわれ、イブセンは病気で欠席する。しかし、舅と嫁の仲は悪くなかったらしい。ベルグリオットは夫の死後、『彼ら三人』と題した本を出したが、⁽⁷⁾そこで夫とイブセン夫妻の三人の生活を生き生きと叙述している。

ところで、これら多くの女性の中で、イブセンの晩年作品にもっとも強い作用を及ぼしたのはヒルドゥール・アンネルセンだったようである。イブセン夫人は帰国後すぐにまた通風の療養にイタリアに旅立ったが、その間、イブセンはヒルドゥールと連れ立って音楽会に姿を現わすこともあった。晩年作品が、『小さなエイヨルフ』を除いて、音楽と深い繋がりを持ち、特に『棟梁ソルネス』の中で非音楽的なソルネスが塔の上で歌ったとヒルデに言われるのは、音痴とされるイブセンへのヒルドゥールの直接の影響ともみられている。翌九二年二月に彼女が音楽の勉強にウイーンに去ると、イブセンは手紙で新作の話などをしていったという。

ヒルドゥール・アンネルセンとイブセンとのことを初めて詳細に報告したのは、ノルウェイの文学史家フランシス・ブルである。ブルの報告は、ヒルドゥールが一九五〇年代の初め九十歳近いときにイブセンからの手紙も贈り言葉もすべて焼いてしまったために、彼女のもとで四十年間働いていた女中の記憶に多くを頼っていた。ところが一九六二年になって、イブセンからヒルドゥールに宛てられた手紙が五通発見され、イブセンの彼女に対する感情は尋常のものではなかったことがはっきりした。ブルが書いている、『棟梁ソルネス』でヒルデが口にする「九月十九日」はイブセンがヒルドゥールに贈ったダイヤモンドの指輪に刻まれていた日付だということの真偽は別としても、この日が二人にとっての特別な記念の日であることは、発見された中の名刺に記された次の文句からも明らかだろう。

九月十九日

一八九一—一八九五年

ヘンリック・イブセン〔印刷〕

ありがとう、すべて、すべて、すべて、この四年間の内容豊かな年月ノ千の挨拶ノ！

『棟梁ソルネス』のヒルデが、エミリーエではなくヒルドゥールを写したものであることは疑い得ないと思われる。私はオスロ大学図書館にしまわれている『棟梁ソルネス』の清書原稿をみせてもらったことがあるが、その表には「一八九四年十一月十五日の日付で「この原稿はヒルドゥールに属する」と記されていた。イブセンは発見されたヒルドゥール宛ての手紙の中で自分を「君の、君の棟梁」と書いており、彼女を「私だけのもつとも親愛なる、もつとも美しい王女さま」と呼んでもいる。これら現存手紙にみられる真情に比べれば、十八歳のエミリーエへの手紙にある、いかにも恋文風の言葉——「あなたの手紙に百回も千回もキスをした」等々——は、ドイツ語という外国語のせいもある。一八九〇年にイブセンがヒルドゥールに自己そうである。一九〇〇年にイブセンがヒルドゥールに自分の二十五作品が収められた全集を贈ったとき次のような言葉が添えられていたという女中の記憶も、かなり信憑性があるとしなければならぬ。

ヒルドゥール

これら二十五の子供たちはみんな我々二人のものだ。

君をみつげ出す前は君を探し求めながら書いた。この広い世界のどこかに君がいることはわかっていた。そして君をみつげ出してからは、ただ、いろんな姿をとる王女さまのことだけを書いてきた。

H・I

むろん、イブセンとヒルドゥールの関係が真実どのようなものだったかは所詮知ることができない。だが、晩年のすべての作品に若い女の性の問題がかつてない露わな形で提示されていることを考えると、彼女との関係の重要さを否定することはできないと思われる。これは、イブセンが十八歳のときに私生児を作ったことと中期作品中に婚外誕生の子供の頻出することとの繋がりや云々するのは全く違った、芸術と生活の問題と言うべきである。メイヤーはイブセンがヒルドゥールともほかのどの女性とも現実に肉体関係をもつことはなかっただろうと考えるが、それは恐らく正しいだろう。だが、彼の晩年作品にみられる性そのものの深淵を見据える目は、やはり自らの経験の奥深くにしか形成されなかったものではなからうか。その経験は、彼がもはや性的な能力を誇示するには年をとりすぎている

こと、そしてそれゆえに劣等意識の裏返し of 優越感で若い女性と親密な交際をもつことができ、まさにそれゆえにますます自らの性的存在に沈思せざるを得ないという、二重にアイロニカルなものだったように思われる。

しかしそれは、断わるまでもなく、当時のイブセンと夫人との関係に照らしてのみ理解できることだろう。

イブセン夫人はヒルドゥールのことを知っていた。この間の事情を示唆する資料としては一八九五年五月七日付のイブセンの夫人宛て手紙があるが、そこでイブセンは次のように書いている。夫人はこの冬からまたもや南へ療養に行っていてずっと留守だった。

〔前略〕おまえの継母の、気がおかしいとしか思えない話し方やいかにも事ありげな言草は、おれにはさっぱり理解できない。今までだつて理解できたためしはない。しかし、おれが「どんな犠牲を払ってでも離婚」を望んでいるなどと書いているとすれば、そんなことは真剣に考えたことも望んだこともないし、これからのないとはつきり言っておく。おまえの気紛れやヒステリーでおれが一時的な絶望に陥って何か口走っ

たとしても、別に他意があるわけではないから気にとめる必要もない。しかし心から忠告しておくが、おまえの健康に必要な精神の安定を望むなら、あの気のふれたおまえの継母とは一切手紙のやりとりを断つことだ。彼女にしてみれば、みんなおまえに良かれと思つてのことかもしれないが、何にでも首を突っ込んでくる彼女の差し出口は、いつもとんでもない結果を呼ぶ。おまえが言いたくなければ、おれが言つてやる。⁽¹³⁾

〔後略〕

一八九二年二月ヴィーンに音楽の勉強に行ったヒルドゥールはこの年の春に帰国していた。イブセンは再び彼女と頻繁に会い、イブセン夫妻の離婚の噂が流れるくらいだったのである。

イブセンとサンナの結婚前に、継母のマグダレーナ・トールセンを交えての一種の三角関係のようなものが(恐らくサンナには知られることなく)あったことの可能性をイギリスの批評家マックファレンは推察しているし、結婚して息子のシィグルが生まれた後、サンナが人前でもう子供はもたないと言つて驚かせたという話を、ビョル

ンソン夫人は口にして⁽¹⁵⁾いる。サンナは性生活を拒否したのではないかと臆測するむきもあるが、⁽¹⁶⁾しかし、イブセン夫妻の仲がおかしいと他人に思われることはこれまでほとんどなかった。

継母のマグダレーナ・トールセンは離婚の噂をわざわざサンナに知らせた時より一年前に、クリスチアニアのイブセン夫妻を訪ねていた。彼らは二人の孤独な人間——それぞれ自分のことしかかまっていな⁽¹⁷⁾い——全く自分のことしか」というのが彼女の印象だった。そもそもイブセンのノールカップ旅行に夫人がついていかなかったのも、夫婦喧嘩のせいだという説もある。ともあれ、『棟梁ソルネス』の他人行儀な夫婦がイブセン夫妻のその頃の様子を反映したものであることは大方が認めている。だが、どの晩年作品にも描かれている夫婦関係の亀裂は、単に仲が悪いという⁽¹⁸⁾ことでは済まない「夫婦という男女関係」の本源的な溝を示すものになっている。

たしかに夫婦間の「性」は、一八八六年の『ロスマルスホルム』以降イブセンの中心主題の一つになっていた。ロスマルの自殺した妻のヒステリーが性的欲求不満に由来するものであることは明らかであるし、次作の『海の夫人』

(一八八八)でも、ヴァンゲル博士のアルコール依存症は妻のエリイダが性生活を拒否していることに原因がある。

『ヘッダ・ガブラー』(一八九〇)のヒロインは、恋人との肉体関係を道徳的ではなく生理的に恐れ、結婚した今は否応なく妊娠した自分の体を憎んでいる。だが、これらの作品における「性」はいわば直線のとでも言おうか、その線上に立てば我々にも行き先がわかる気がするものである。

しかし、晩年になると、それはむしろ渦巻きのように、吸い込まれればどこまで落ちてゆくかわからない不安を感じさせるものになっている。たとえば『小さなエイヨルフ』の夫婦の「性」は、不満とか拒否とかいうより、男女のありかたそのものに潜む何か名状しがたい齟齬を示すもの、一見表面的のようであり底に沈めば沈むほど新たな秘密が露になる類いのものである。『棟梁ソルネス』や『ヨーン・ガブリエル・ボルクマン』でも、それぞれ若い女のカーヤやヒルデの異常性欲が正面に立ち、若い男女の「性」本位の恋愛が展示されるその分だけ、夫婦の「性」は底に隠されて姿をみせない。最後作の『私たちが死んだものが目覚めたら』では、何の屈託もなく選ばれる結婚外の「性」が結婚内の「性」を陰に追いやっている。

帰国後のイブセンは世界的大家家として世間的には波乱のない生活を送っていた。しかし、冷えた夫婦生活、ヒルドゥールとおそらく彼の側からは絶望的な繋がり、そして芸術家としての内面の孤独といった、全く別の生活をも同時に生きていたように思われる。ノルウェーのホーコンスン教授はそれを「二重生活」と呼ぶが、イブセンの晩年作品のすべての主人公にみられる二重性は、たしかにその反映に違いない。

それにしても、そういう男女関係や夫婦関係が当時の読者や観客にためらいなく受け入れられたかといえば、たしかに一般にはとまどいが大きかっただろう。しかし頭から異端視される時代でもなくなっていた。新しい文学思潮の波は北の小国の海岸にもまごうかたなく打ち寄せていたからである。「性」の表現はなにもイブセンにだけ特有の文学現象ではなかった。

(三) 一八九〇年前後のノルウェー文学

一八九一年秋、首都のクリスチアニアで三十二歳の小説家クヌート・ハムスン(一八五九—一九五二)が三回連続の

文学講演会を催した。イブセン、ビョルンソン、ヨナス・リー、ヒェランら、いわゆるノルウェー近代文学の「四大作家」を時代遅れと批判するとともに、新時代の文学のあり方を示すことが目的の講演だった。⁽¹⁹⁾招待を受けたイブセンはヒルドゥールを伴って三回とも出席した。

ハムスンは前年に出した『飢え』で一躍名声を得た作家である。この小説は作家志望の青年の飢えの極限状況を克明に描きながらも、自然主義文学とは違ってかなり偏執狂的であり、かつ、すべてがどこか他人事のような雰囲気をもつ作品である。(日本でも戦前はよく知られていた。林芙美子の『放浪記』がその影響のもとに書かれたことは定説となっている。)同じような作風は、ある田舎町に現われた正体不明の男の物語『神秘』(九二)にも、北国の森の中の不思議な男女の恋愛を描いた『牧羊神』(九四)にもみられる。たしかにこれらの小説には、それまでのリアリズム文学にない新鮮さを感じさせる『モダニズム』の香りが漂っていた。

⁽²⁰⁾ハムスンが示した新文学の指針は要約すると次のようになる。

(一) 文学はリアリズムでなければならぬ。それは人生をあるがままに描くことであり、七〇―八〇年代のノルウェー文学はこの点でリアリズムからあまりに遠く離れすぎている。

(二) 特に重要なのが心理的リアリズム、つまり意識されている内面世界だけでなく、無意識の心的生活を描くことである。これまでの文学は外的な行為や事実を描くことで満足していた。しかし、そういう行為や事実がどのようにして生じてくるかを示すことが重要なのである。

(三) したがって、心理的リアリズムの中では、一人の人間の心的生活に生じる流動性、変化、突然の動きなどが重視されねばならない。つまり、どのようにしてかすかな印象から幻想が生み出され、多くの方向へと連関されてゆくかを描くのである。

(四) 右に述べたような心理描写の結果、作中人物は独自の個人として登場する。その心的生活にいろんな傾向や特有性、しばしば相反し対立する要素がみられる個人である。従来のリアリズム文学で

は、人間は一つか二つの特徴をもったタイプとして全篇を貫いている。それというのも、人物を生きた人間としてではなく、第一に理念や原理の擬人化として描いているからである。

(五) 文学は道徳を教えたり社会を改革したりするものではない。作家は「大きな赤ん坊」の教師ではない。作家にとっての唯一の課題は普通の人間についての真実を述べることである。

(六) こういった新文学の方向を実現するには新しい文体が不可欠である。言語から新しい価値、新しい響きを引き出さねばならない。言語を「血の囁き、骨の祈り」の描写にふさわしい道具にしなればならない。

講演の冒頭でハムスン⁽²¹⁾は、攻撃的たらんと努めるのは「自分の考える新しい文学のための場所が必要だからであり、すでにあるものを取り扱わないかぎり場所はないからである」と述べた。翌年書かれたイブセンの『棟梁ソルネス』には、たしかにこのハムスンの言葉が反響している。だがイブセンにとって彼の主張はなほどの新味もないも

のだった。誰もが指摘するように、『ロスメルスホルム』(二八八六)以降のイブセン劇はすでにハムスンの求める方向を先取りしていたし、それだけでなく、ハムスンの考えに似た文学観をイブセンは帰国前のミュンヘンですでに耳にしてもいた。

一八九〇年前後のミュンヘンはドイツ・モダニズムの中心都市であった⁽²²⁾。彼らのモダニズムはまず自然主義文学として成立したが、ベルリンのそれ(オットー・ブラームの自由舞台はその象徴的存在だった)とは違って、ミュンヘン自然主義の推進者ミヒャエル・ゲオルグ・コンラット(二八四六一一九二七)の立場はヴァーグナー、ニーチェ、ゾラをとともに信奉するというものである。「よき指導者、案内人としての芸術家、人生の熟達者、未来の形成者としての芸術家——これが、文化国家における芸術のありかた⁽²³⁾と意義についての新しい自然主義的芸術家観である」と、コンラットは述べている。彼が信奉する作家の中には、当然、ミュンヘン在住のイブセンも入っていた。イブセンは、奇妙な取り合わせだが、この地と関りの深かったヴァーグナーと並んでミュンヘン・モダニスト芸術家たちの支柱的存在とみられたのであった。

このコンラットが一八九〇年十二月に創設した「現代生活協会」は翌年一月に第一回の公開講演会を催した。その講師の一人であったハンス・フォン・グムペンベルグ（一八六六—一九二八）は、当時の大御所的存在の作家パウル・ハイゼの詩を揶揄し、「正統」文化の擁護者を批判して騒動を引き起こした。彼は亜流理想主義と客観過多の自然主義を止揚した「主観的リアリズム」を提唱していたのである。⁽²³⁾

なるほど、ハムスンの『飢え』には、空腹を抱えた作家志望の青年が行きずりの高等娼婦に声をかけ、彼女は彼を高級アパートメントに迎え入れながら交渉を拒否するといった場面がある。主人公とともに、われわれも彼女の心理の謎に戸惑う。『牧羊神』には、森番の男と彼の心を弄ぶ資産家の娘、彼に尽くす人妻というこれまた不可思議な三角関係が描かれる。しかし、女性心理の不可解さでは、『ロスマルスホルム』のレベッカや『ヘッダ・ガブラー』のヘッダを凌駕するものは少ないだろう。周知のように、新しい女性心理を描いた芸術思潮はどここの国でも社会道徳を無視する世紀末デカダンとして一般の輿感を買ったが、イブセンも外国ではそういうデカダン作家として非難的

になつていた。⁽²⁴⁾

だがノルウェーでは、極端に反道徳的な「退廃文学」の現われはむしろ一八八〇年代半ばにみられたのであった。「クリスチアニア・ボヘーム」と称される一群の若い作家の作品である。

彼らいわば無頼派作家の筆頭にくるのはハンス・イエーゲル（一八五四—一九一〇）である。首都のボヘミアンたちの売春婦との性生活を赤裸々に描いた彼の小説『クリスチアニア・ボヘームから』（一八八五）は、出版と同時に発売禁止となつたが、小説としてはそれほど高く評価されないものの、これはアナキストを自称したイエーゲルの虚飾を剥ぎ取った告白の書であつた。彼は翌年の上級裁判法廷で禁固六十日の判決を受け、破滅的な生涯を送ることになる。エドヴァール・ムンクの描いたグラスを前にして座っている「ハンス・イエーゲルの肖像」（一八八九）は一般にもよく知られているだろう。

同じ八五年に、もう一つ世間の非難を浴びた小説の出版があつた。ノルウェー最初の女性自然主義作家とされるアマリーエ・スクラム（一八四六—一九〇五）の『コンスタンス・リング』である。中流階級出のコンスタンスは、かな

り年の違ふ夫を愛することができず、その腕に抱かれることに嫌悪を感じるのみだったが、彼が死んで、二度目の夫とは幸福な結婚生活を送っていたのに、彼が以前の愛人といまだに会っていることを知り自らの愛を殺す。だが、彼女自身の愛人さえもが彼女を裏切っていることの発見は彼女を狂的な自己嫌悪に落とし入れ、自殺に追い込むのである。この小説が保守派の新聞からゾラの『ナナ』以上に背徳的だと攻撃されたのは、何よりも結婚や愛が肉欲と切り離せないものとして描かれているからであった。スクラム自身が十八歳で結婚し、やがて離婚、クリスチアニアの芸術家サークルでの自由な生活を送ったあと、『コンスタン・リング』出版の一年前にデンマークの文学者エーリック・スクラムと再婚してコペンハーゲンに居を落ち着けた、その私生活の告白的な要素があるとみられたことも非難に拍車をかけた。

翌八六年、画家のクリスチアン・クログ（一八五二—一九二五）が書いた小説『アルベルティネ』も出版の翌日発売禁止となった。一人の女工を誘惑した警官が彼女を売春婦として登録し転落の道に追いやる話で、その警察での場面を描いたクログ自身の絵も有名である。この本の発

禁処分抗議する五千人の人々が首相官邸の外で公娼制度反対を叫び、それが翌年の売春禁止法のきつかけになったとも言われる。

同じ年に出たアルネ・ガルボルグ（一八五一—一九二四）の『男ども』も、男性中心社会における性道徳の偽善を暴く「無頼派」小説の一つである。三年前の『農村出身学生』で農村出身の神学生が貧窮と嗜眠に陥り、妥協の結婚へと進んで行く様を描いたガルボルグは、今度は、集まれば女を買う話しかすることのないボヘミアン学生たちに混じって、同時に二人の女と関係をもつ神学生が下層階級の女を弄ぶ一方で、教育ある女に身の純潔を誓って婚約する話を描いた。

これらの小説がいわば文学的スキャンダルとなったのは、ノルウェー文学で男女の性生活がこれほどあからさまに扱われたことはかつてなかったからであった。とりわけ、アマリーエ・スクラムが女の性衝動を初めて提示したことは世間に大きな衝撃を与えた。女には性欲も性のオーガスムも存在しないというのが十九世紀の常識だったのである。⁽²⁶⁾ 彼らのあとでは、イプセンの晩年作品にみられる先に述べたような女の性の直接的な表現が、その真意の理解

はともかく、それほど異端的とみなされなかったのもうなづけよう。ハムスの小説が描く異常恋愛も、スキャンダルという点では八〇年代後半の作家の比ではなかった。この意味でノルウェーには他国のような世紀末デカダン文学は広まらなかったとする批評家もいる。⁽²⁷⁾

これらのボヘミアン作家たちの大方は、生まれたのが一八五〇年前後である。つまり、イブセン、ビョルンソン、ヨナス・リーといった三〇年前後に生まれた「大作家」たちより二十年若い。(この意味では一八四九年生まれのヒエランも前者に属する。両世代の中間に位置する作家で、後世に残るものはほとんどない。)この二十年の違いは大きな意味をもったと思われる。若い作家たちが現実の露悪的描写とも言える極端な自然主義に傾いた背景には、明らかに、一八八四年のノルウェー近代政治史上最大の(「内乱」とも表現される)事件、自由派の政権獲得による議会議政局の確立があったからである。この変革への若い世代の期待が大きかっただけに失望も深かった。過激派作家とみられたヒエランへの詩人年金付与が自由派が多数を占める議会で否決されたとき、「大作家」たちは保守に変身した左派政治家を声高に弾劾した。しかし、この頃作家活

動を始めたばかりの若ものたちは身辺のアナーキーな生活に沈み込む以外、進む方途を見出せなかったのである。彼らはそういう形で社会の偽善を痛烈に告発した。

だが、従来のノルウェー文学史では、一八九〇年前後に明確な転換が生じたと言われていた。⁽²⁸⁾すなわち、これら八〇年代の傾向文学、自然主義文学は九〇年代に入ってから新潮の台頭とともに死に絶えたというのである。近年はこの見解に異議も出されているが、おそらく、リアリズムあるいは自然主義の理解の違いによって見方は変わってくるだろう。九〇年代の衰退を云々するとき、リアリズム作品とリアリズム作家との混同もあるように思われる。ノルウェー文学では、世紀末の新旧作家の交替はそう単純には進行しなかった。

ハムスを代表作家の一人とする一八九〇年代の新思潮は、ドイツ文学史と同じく、ノルウェー文学史でも「新ロマン派」と呼ばれている。そこには、小説家として他にハンス・E・ヒンク(一八六五—一九二六)がおり、詩人にはシグビョルン・オプストフェルデル(一八六六—一九〇〇)、トーマス・P・クラグ(一八六七—一九二二)、劇作家にグンナル・ヘイベルグ(一八五七—一九二九)らがいる。彼ら

はその生年をみればわかるように、先のボヘミアンたちよりも一つ後の世代である。したがって、九〇年代のノルウェー文学には、イブセンらの世代と、二十年の年齢差のあるガルボルタらの世代、もう十年隔てるハムスンらの世代という三つ巴の新旧模様がみられた。そしてその模様を複雑に織りなしたのは、この縦縞に対するいわば横縞ともいえる作風、題材の共通・相違点であった。

ハムスンによって否定された大作家たちの勢いが衰えたわけではない（ヒェランが九一年以後筆を折って地方政治家になったのを除けば）。しかし彼らのリアリズムにある種の変容が生じたことは事実である。パリに住むヨナス・リーはいち早く世紀末象徴主義の洗礼を受け、⁽²⁰⁾ビョルンソンも、たとえば一八八三年の戯曲『人の力を超えるもの』第一部と九五年の同作第二部を比較してみれば、芸術的価値では前者に及ばないとするむきが多いとしても、ノルウェー最初の階級闘争劇と言える後者の新しさを否定することはできない。イブセンの場合も、晩年作品にリアリズムの変容をみることは一般的だろう。

だが、リアリズムの変容を認めることは、彼らがリアリズムを放棄したとか反リアリズムに転じたこととみることでは

ない。少なくともイブセンの場合、かつてのリアリズムの枠をはみ出る要素は少なくないとしても、その枠組みが取り外されることは最後までなかった。たしかに、最後作の『私たち死んだものが目覚めたら』（一八九九）にはほとんどその枠を無視しようとする衝動がみられる。しかしその衝動に身をまかせることをイブセンはついにしなかった。むしろ晩年のイブセン劇は、そのリアリズム変容と矛盾しない形で、現実の社会状況、生活様式の即物的な反映を強めている。ハムスンの連続講演に出席したのも、前年の小説『飢え』が都会の新しい生活様式の忠実な記録という側面をもっていた⁽²¹⁾ことに共感したのであったかもしれない。

しかし他方、『飢え』のあとのハムスは作品の舞台をはっきりと都会から地方に移した。その後の彼の大部分の作品は田園や森林を背景として展開する。これはノルウェー「新ロマン派」文学の特徴の一つともなる。この派のもう一人の代表的小説家リンクにとつては、田舎の生活に基盤をおくことは単に題材の問題ではなく芸術的立脚点にかかわることであった。

リンクは北国のフィンマルクで生まれたが、地区医者だった父の仕事の関係で居住地を転々とし、六歳から十歳ま

では南部山岳地帯のセーテスダールにあるフロエイスネスに住んだ。ここで彼はもつとも幸福な少年時代を送ったという。そのあと一家は西海岸のベルゲンからほど遠くない群島の海に面したストランネバルムに移る。このときの、古い習俗の残る「民謡豊かな谷間」から海水に洗われる村の「合理主義」への環境変化は、彼にはまるで「平手打ち」を食らったような感じだったと後に述懐している。³²ノルウェーの文学史家は次のように書く。

彼はこのことを決して忘れなかった。それは彼にノルウェー人の心に宿る対立した心情、基底となる性格について考えさせた。これが彼の文学活動の原点となる。彼は、セーテスダールやストランネバルムの農民たちを知ることから、より広く国民全体を理解する方向に進んだ。そしてそこで得た洞察力をもって、対立葛藤期のノルウェー文化、ヨーロッパ文化の問題へとまなざしを向けたのである。³³

「対立葛藤期のノルウェー文化」というのは、十九世紀を通じてつづいた農民文化と官僚文化の対立のことであ

る。世紀の半ばまでは自給自足国に近かったノルウェーで、農民文化とは伝統文化の別名だが、一八一四年のデンマークからの分離以後、他国に比べればものの数にも入らないとは言え、首都を中心とした官僚階級が力をもち出し、彼らが形成する新しい都市文化は農民文化を次第に侵食していった。

この対立は、言語上は、デンマーク語をノルウェー語発音に合わせた「リクスモール」と、イヴァール・オーセンが地方のノルウェー独自の語彙・文法を採集して作り上げた（二八一三―九六）た国語「ランスマール」の対立となる。³⁴ヒンクがセーテスダール地方やストランネバルムのあるハルダンゲル地方を舞台にその方言を使って書いたことも、明らかに都市文化に対する異議申し立ての意味があった。彼の小説が当時の人々に理解困難であった第一の理由はそこにある。方言文学は二十世紀には珍しくなくなるが、ヒンクはその先駆的作家であった。

また農民文化と官僚（都市）文化の対立は、政治的には、地方選出の議員が多数を占める議会と連合君主たるスウェーデン国王が任命するノルウェー政府内閣との対立となる。農民は政治的に保守派でありながら国粹的でもあるた

めに、やがて出てくる自由主義的「左派」政党の反政府、反スウェーデンの立場を支持し、先述の一八八四年の政治転換を後押ししたのであった。しかし、それは農民文化の衰退を早めこそすれ食い止めることにはならなかった。

九〇年代の新ロマン派文学はこの都市文化傾斜に対する一種の反動だったと考えられる。その典型的な表われの一人がガルボルクであった。前世代のボヘミアン文学すなわち都会文学の代表作家の一人であった彼は生まれ故郷の田舎イエーレンに戻り、その生活を基盤にした作品を書いてゆく。もっともガルボルク自身の中に初めから農民文化と都市文化の対立があったことは『農民出身学生』にすでに明らかであったし、もともと彼は新ノルウェー語である「ランスマール」で書いていた。

だが、これら農民文化志向の新作家たちは外に対して閉鎖的だったのではない。むしろ先進文明国での経験が彼らの文学を培ったところがある。ハムスはアメリカ滞在を文学活動の出発点にしたし、ヒンクはイタリアで、ガルボルクはドイツで新しく文学開眼した。彼らは一樣に欧米の先端的な芸術に通暁した知識人であり、同時代の数少ない国際的なノルウェー人作家でもあった。

しかし彼らが他国の世紀末作家と違って、近代都市文明の否定に傾いたことは、一樣にニーチェの影響を強く受けていたこととも無関係ではないだろう。そもそもニーチェが世に知られるようになるのは一八八〇年代からであり、そのきっかけを作ったのは、ブランドスの一八八八年五月コペンハーゲンにおけるニーチェについての講演だった。ニーチェはまず北欧に信奉者をもち、彼らが外国でその名を広めていったのである。³⁵

イブセンやビョルンソンは逆の方向を辿る。いずれも地方に生まれ、民族的ロマン主義時代の末期にあたる初期活動期には田園を背景とした作品を書いた。だが、農民に圧倒的な人気があったビョルンソンでさえ、初期の農民小説のあとには、いたずらに田園に逃避することはしない。先に触れた九〇年代の彼の代表作『人の力を超えるもの』第二部には明確な異文化の対立様相があるが、地方に舞台を設定した第一部とは違って、それは都市における新しい階級対立に重ね合わされている。

イブセンの場合はもう少し複雑である。一見したところ彼の晩年には都市を離れる傾向がみられる。明確に都市が舞台になっているのは『ヨーン・ガブリエル・ボルクマ

『二八八六』だけで、『棟梁ソルネス』(二八九二)は町はずれであろうか、他の二篇『小さなエイヨルフ』(二八九四)、『私たち死んだものが目覚めたら』(二八九九)は、町から離れたフィヨルドのほとりや山の上で劇が展開する。

これ以前のイブセン市民劇では、九篇のうち、首都または地方の町で劇が進行するのでない、作品は『幽霊』と『ロスメルスホルム』そして可能性として『海の夫人』だけであり、これらも基本的に都市生活者と交わらない人物が中心になっていることを考えると、この点での晩年の新傾向を否定することはできない。

しかし新世代の作家たちとは根本的に違って、イブセンの晩年作品に農民や土着の人が表立って登場することは、最後作『私たち死んだものが目覚めたら』の地主ウルフヘイム以外、全くない。主要人物はどれも芸術家か知識人またはそれに類する人々である。なるほど、ビョルンソンの場合に似て、イブセンもこれまではほとんど無視していた社会の下層や裏側にいる人々に目を向け出している。『棟梁ソルネス』の虐げられた若ものたちは、棟梁の墜落死とともにどっと舞台上に雪崩込んでくるし、『小さなエイヨルフ』にも、裸足の子供たちや金切り声をあげて夫婦喧嘩す

る貧民階級が遠景にいる。『ヨーン・ガブリエル・ボルクマン』のフォルダルは、『野鴨』のエクダルのように没落したのではなく、もとの下級公務員でしかない。だが彼らは、主要人物の対立者というよりは、ある脅威あるいは恐怖を感じさせる異文化の所有者として対置されている。『小さなエイヨルフ』の鼠婆さんも、まさしくそういう存在としてみるべきだろう。いたずらにリアリズムを破る神秘的存在ととるべきではない。

イブセンは近代社会に鋭い批判を投げつけたが、都市文明そのものを否定することはしなかった。いったん故郷を離れるや両親の死に際にも帰ろうとせず、国を棄てて二十七年間異郷に住んだ。たしかに故郷喪失を嘆いてはいるものの、彼が⁽³⁶⁾もつとも嫌ったのは劣等感と重なった独善的なノルウェー人の郷土意識(Norskostolen)である。彼は死ぬまで自分の家をもたない根無し草の都会人であることを通した。

(ここで想い浮かぶのは、文明否定に走ったハムソンのその後である。『大地の恵み』で一九二〇年のノーベル文学賞を受賞したハムソンは、長生きしてナチズムの台頭を目のあたりにし、ドイツ文化への憧憬もあってその思想に

共鳴する。彼はナチのノルウェー占領中もその態度を貫いたため、戦後、裁判にかけられた。高齢による精神異常が原因だったとして無罪となったが、しかしこれは今もって完全には拭かれていない現代ノルウェー文学史上の汚点である。

こうみてくると、イブセンが晩年、自らのリアリズムを変容させると同時に現実の社会状況、都市生活の即物的な反映をも強めていたことは特別な意味をもってくるだろう。一八九〇年前後を境として、北の小国の都市文化にも大きな変容が生じていたからである。外の変容と内の変容、この二つは晩年のイブセンにおいて密接に繋がることであった。

(四) 都市生活の変容

これまでに私は短期滞在を含めて十回ばかりノルウェーを訪れている。だが一九八七年初秋の訪問では、最初に述べたノールカップ旅行以外にもう一つ初めての経験をしてみた。ノルウェーの町が変わってきているという印象をもったことである。

こんなことはそれまで一度もなかった。いつも、オスロの中央駅に降り立ったり、空港からリムジンバスで町中央までくる途中、落ち着いた町のたまたまの中で心安まり、ちっとも変わっていないな、という感慨をもつのが常だった。

ノルウェーの首都オスロは人口五十万、観光客には三日もいればすることがなくなる小都市である。デンマークのコペンハーゲンやスウェーデンのストックホルムに比べても、明らかにプロヴィンシャル・タウンと言わざるをえない。中央駅から丘の上の王宮まで真っ直ぐに一キロほどつづくカール・ヨハン通りがほとんど唯一の目抜き通りで、通りの途中、王宮に向かって左側に国会議事堂があり、右側にイブセンが通ったので有名なグラランド・カフェがある。王宮近くに昔の大学もあり、向かい側の広場に国立劇場が立っている。

質素、素朴、悪く言えば退屈。ところが、いつきても変わらなかったオスロの町が、今度はどうも感じが違っていた。カール・ヨハンの下を地下鉄が走るようになり、第二国立劇場のノルウェー劇場が馬鹿でかく派手な建物に変身し、しかもまだ至るところ建設工事中、という喧騒さのせ

いだったのだろうか。それもあるだろう。オスロにかぎらず、ベルゲンもスタバンゲルもトロムソも、今度行った町はどこも工事だらけだった。(実は、ノールカップもそうだった。地下に岩壁に面したレストラン付き全天候型展望台を作って観光客をもっと集めようというらしい。来年完成と聞いて、私は今年きたことの幸運を喜んだものだ。) 町を走る車の量も格段に増えていた。しかも日本製の車の氾濫である。

だが、何よりも変わったと思ったのは人の態度だった。以前は、東京の大使館から通知を受けたと外務省文化局で係りに告げると、一片の紙切れをみせるわけでもなく、滞在の奨学金をその場でくれた。これにはいつも感心した。しかし今度は、外務省が部屋を確保しておいてくれたはずの山の上の学生寮に行くと、名簿一覧は下の本部にしかないからそこに先に行けという。電車で十分はかかる。電話で問い合わせればすむことではないかと思つたが、杓子定規でとりつくしまでもない。だが本部に行つてわかつた。名前はコンピュータに入力されている。寮のアルバイト学生にはどうしようもないわけである。それにしても、あんなにけんもほろろな言い方をするのではないのに。

これほど変化が目立つのは、この訪問が六年ぶりだからかもしれないと思つた。こんなに間隔をおいたことは初めてだったから。しかしノルウェーの友人もここに長く住む日本人の知人も、みな異口同音に私の印象に同意した。たしかに、ここ四、五年の間に町と人は急激な変化をみせている、と。

問題は何ごとも機械仕掛けになつたことにある、とノルウェーの友人は言う。しかしそれも含めて、いちばんの原因はやはり経済問題だろう。私は社会学者でも経済学者でもないから因果関係の正確な分析はできないが、文化もまた経済の支配に屈することは我々の身辺をみまわしてみてもわかることである。

この現象がノルウェー特有のことではないの言うまでもない。北欧全体、ヨーロッパ全体、いや世界中が変化している。日本でも八〇年代の変わり方はあらゆる分野ですぎまじい。ただ、日本では金がだぶついているからだが、ヨーロッパでは金が足りないからだ。

なるほどノルウェーは北海油田の開発によつて、スカンディナヴィア三国でいちばん貧しかったのが一躍豊かになつた。今に税金は一切なくなるだろうなどと言うものさえ

いた。ところが、そこに到来したのが石油価格の急落だった。と。

政治の混乱もある。ノルウェー労働党が議会の過半数をとらなくなって久しいが、政権担当政党の勢力に浮沈が激しい。スウェーデンの進歩派首相バルメの不可解な暗殺は、対岸の火事ですまされぬものがある。

そして西ヨーロッパ先進国の共通した悩みに、難民、移民の問題がある。北欧諸国の彼らに対する過保護ともみえる手厚いあつかいには本当に敬服するが、ノルウェーでは圧倒的にパキスタン人が多く、その異人種、異文化併存がまったく軋轢を生まないといったら嘘になるだろう。経済逼迫はいちばんに彼らの待遇にひびいてくる。

人々の心に意識されてか無意識のままにか巢喰っている不安、それが一九八〇年代終わりのオスロの町の喧騒を一層落ち着かないものになっている。九〇年代には、それははつきりと顕在化するだろう。そして私は考えた。この状況はちょうど百年前のノルウェーのそれに大変似たところがあるのではないかと。

十九世紀末、ノルウェーは遅ればせながら工業先進国のあと追いかから、その仲間入りを果たそうとしていた。そし

てそれはノルウェーにとって全く新しい混乱を経験するもとなっていた。イブセンが一八九一年に、これも六年ぶりに故国に戻ったとき、おそらく今度私が感じたものに似た異様さを、船から上陸した途端に感じとったのではなかったか。こういう推量は恣意的にすぎるにせよ、イブセンが町の変貌を目のあたりにしたことはまぎれのない事実であった。

首都オスロは一六二四年から一九二四年まではクリスチアニアと呼ばれていた。一八七八年にこの町の人口は十一万二千人だったが、一九〇〇年には倍の二十二万七千人に増えていた。イブセンが帰国した頃の国全体の人口は約二百万で、一九一〇年にはそれが二百四十万になった。この二十年間に移民として国を出たものは三十万人、一八八〇年代の十年間には二十万人がアメリカに渡っていた。これから移民の大部分は田舎出だった。一八五五年から九〇年までの三十五年間に地方人口は八十八万五千人増加したという統計があるが、土地に残ったのはその四分の一だけで、あとの六十六万人は都市かアメリカに流出したことになる。世紀末のノルウェーでは、都市人口は国全体の約四分の一に達していた。地方の経済もまた自給自足の自然経済

から金銭経済に転換せざるをえなかった。先に述べた農民文化の衰退が想像される。

都市人口の増加は居住地の拡大を要求する。⁽³⁸⁾ 首都の領域は急速に広がっていった。一八八〇年頃の首都の区域は世紀半ばのその十倍を超える。新進の建築家ゲオルグ・ブルの設計による高級住宅街ホームンスビューエンが王宮の北西にできあがったのは一八七〇年頃である。富裕な商人のトルヴァル・メイヤーはアーケース川の東側にあったごみごみした労働者居住地を買いとって、同じブルの設計でモダンな労働者住宅街に変えたことで慈善家として名を売った。民家の建て方、内部構造も近代化した。『棟梁ソルネス』で、ソルネスが斬新な設計の分譲住宅を建てて建築家としての名声を得たというのは、当時いかにもありそうな話だったのである。

首都クリスチアニアの外観は確実に変貌していった。市の現存の八十五%の建物が一八五〇年から一九三〇年の間に建てられたものだそうだが、そのうちの三分の一は一八九〇年代の建造物だという。町中央の変化は特に激しかった。その典型例は、王宮横にあったアルジェリアとかテュニジアとか呼ばれていた貧民区域で売春街として有名だった

た一帯が取り壊され、あとに壮大な超高級アパートメント、ヴィクトリア・テラッセが建てられたことである。一八七四年に計画が始まり八五年に完成した。帰国後のイブセンがこのアパートメントの7Bに入ったことは初めに記した。

従来は貧乏人も金持ちも比較的隣合わせに住んでいた。それが次第に階層別に色分けされる町作りになってくる。町の東側に労働者層が集中し、西部から山に向かって中流以上の人々が住むようになった。都市の内部においても明確に二つの文化が形成されてくる。少数派のブルジョワ層の生活様式と大多数の庶民(労働者、手職人、小役人、小商人等)の生活にみられる異なった文化である。⁽³⁹⁾

労働者の年収は六百クローネそこそこ、日雇いは一日二ないし三クローネだった。児童労働も普通に行なわれていた。一八九二年にようやく十二歳以下の子供の就業を禁止する法律ができたが、前年の統計では、登録された賃金労働者の約十二%が十五歳以下だったという。⁽⁴⁰⁾ それでも自作農民の下で働く「小屋住み小作人」(Husman)に比べれば都市労働者はまだまじだった。町に出て仕事にありつければ食べるだけはないとかやってゆけたからである。(ちなみ

に、この頃のイプセンの年収は、ヨーロッパの他の大作家に比べればはるかに少ないが、ノルウェーでは最高の部類に属する。帰国した一八九一年が一九、四六三クローネ、全集出版の一八九八年には八八、四一〇クローネの収入にのぼった。⁽⁴⁾農村から都市へと職を求めて人が流れてくるのはけだし必然であった。

一八九〇年代はノルウェーにとって急激な産業構造の変化が進行した時代でもあった。遅れてきた「産業革命」と言ってもいい。たとえば、産業労働者の数が一八九〇年の十三万一千人から一九〇〇年の十六万七千人に増えている中で、建設事業や発電所の仕事に従事する人口は三万五千から倍近くの六万一千に増加している。つまり小さな工場の労働者数は変わらないで、大工場で働く人の数が圧倒的に増えた。農村からの出稼ぎだけでなく、手工業者や職人も大工場に吸収されていったのである。

労働条件に大きな影響を与えたのは電気エネルギーの利用であった。一八八五年、ノルウェーで最初の発電所がイプセンの故郷シェーエンに作られた。首都クリスチアニアは一八九二年に蒸気発電所をもつが、一九〇〇年になって近くのハンメレンの水力発電所から電気が送られるように

なる。水力にめぐまれたノルウェーでも、家庭内の諸々の道具が電化されるのは二十世紀に入ってからのことだが、大工場がいち早くとり入れた電気照明は日没後の仕事を可能にし、それまでの労働の季節性を解消してしまった。

これまで労働者は工場の近くに住み、仕事先を変えると住まいも変わるのが通常のやり方だった。彼らは昼には家に戻って食事をしたのである。だが一八七五年に路面馬車が走り出した。一八九五年には市街電車が運行し出す。そうなると、住まいと工場が離れていてもよく、それが住宅地の色分けを一層強くした。昼食をとり家に戻らなくなれば、当然、家族同士の接触は少なくなり人間関係も変わってくる。イプセンの『ヨーン・ガブリエル・ボルクマン』に登場する小役人フォルダルの生活は、まさにこういう変化の先取りだったと言えるだろう。

家族同士の接触が少なくなることは一見矛盾するようだが、世紀末にかけて人々の行動は地域集団的なものから家族的なものに傾いてきたと言われる。⁽⁵⁾都市の大部分の住まいが一戸建てからアパートメントに変わったこともそれに拍車をかけた。我々もよく知っているように、アパートメント住まいは隣近所との付き合いを全くなくしてしま

う。この家族中心の傾向が特にブルジョワ階級で顕著だったのも理解できることである。勢い、夫婦や親子の関係が関心の的となる。イブセンの『小さなエイヨルフ』や『ヨーン・ガブリエル・ボルクマン』にもそれははっきりとみとられよう。これらの作品に描かれる閉ざされた家族状態は、明らかに『ヘッダ・ガブラー』（一八九〇）までのそれとは違ったものである。

むろんこういった都市の変貌、それによる生活様式、人間関係の変化はノルウェーあるいはクリスチアニアだけの現象ではなかった。ヨーロッパ自体が十九世紀の最後の三十年間に大きく変わったのである。一八七〇年までは、いくつかの国や都市の工業化はあったにしても、基本的な産業は農業であった。生活は農民の方が工場労働者より安定していた。それが一八七三年以後、激変してゆく。交通機関と運輸方法の発達は外国からの商品輸入を容易にし、その価格を飛躍的に下げていった。特に穀物と衣類の値下がりには甚だしく、都市生活者には歓迎されたが農民には打撃を与えた。いわゆる一八七三―一八七六年の「大不景気」とはこれを言うが、しかし工業生産の増大による経済力拡張の点では、この時期は大いなる躍進の時代であった。

フランスを除けば、各国の人口も激増した。一八七〇年から一九一四年にかけて、ドイツは三千五百万から六千万に、イギリスは二千五百万から四千万に、ロシアは六千万から一億四千万に増えた。しかもこの間にヨーロッパからアメリカへ渡ったのは二千五百万人、他の国には数百万が移住したという。一八〇〇年に百万人以上の都市はヨーロッパに一つもなかった。一九〇〇年には九都市で人口百万を越えた。それにつれて、農村の人口比率は下がる一方であった。

イブセンが一八九一年まで住んでいたミュンヘンも人口増大の例外ではなかった。一八九〇年のこの都会の人口は三十五万で、世紀初頭の十数倍に達していた。⁽⁴⁴⁾新しい状況に応じた町作りも多くの都市で遂行されていた。ヴィーンのリングシュトラッセは有名だが、ベルリンは一八八〇年代に建築ラッシュで様相が一変したという。⁽⁴⁵⁾だからイブセンにとって、帰国後に目にしたクリスチアニアの混沌はことさら新しい経験ではなかったかもしれない。だが小国ノルウェーのそれは、都市の規模が小さいだけにより一層異様さを増し、はっきりと事の実相を露呈させたという点とはあつたに違いない。

しかし、こういった都市文化の「進歩」が、生活の外観だけでなく人々の心をも豊かにしたかと言えば、全く逆であった。それは人の心に拭いた不安を植えつけていたように思われる。あるいは恐れと言おうか。ノルウェー語の「アングスト」Angstは、ドイツ語同様、両方の意を含むが、この語を題名とするエドヴァール・ムンクの有名な絵をみれば、鋭敏な芸術家の目には人々の心に巢食っている不安と恐れがはつきりとみえていたことがわかる。それが単にムンク個人の不安の表現ではないことは、クリスチアニアの街頭を描いた彼のいくつかの絵が示唆している。おそらくそれは、労働者階級に対するブルジョワ階級の恐れであり、女性の目覚めに対する男性の不安でもあっただろう。いや、むしろ「進歩」そのものに含まれる Angst だったと言うべきかもしれない。

(五) 労働運動と女性運動

かつてイブセンは、世界の未来の高貴さを担うのは過去の因習から自由な存在である労働者と女性だと演説したことがあった。⁽⁴⁷⁾ たしかに、労働運動と女性解放運動は世紀の

変わり目のヨーロッパにおける最大の社会改革運動となる。ノルウェーでも、一八八四年、二つの新しい新聞『我が労働』と『ノルウェー女性』の発行という形でこれらの動きは自己主張を始めていた。

『我が労働』は一八八七年に結成された労働党の機関新聞『社会民主主義者』となる（一九二三年からは『労働者新聞』と名称を変える）が、労働者の環境の変化は彼らの意識の変化をもたらしていた。一八九九年に産業労働組合の全国組織ができるその十年前から大きなストライキが頻発していた。一八八九年にまず、大規模な植字工のストライキ、そしてビョルンソンが応援したので有名になったマッテ工場の女工のストライキがあり、モスでセルロイド工場のストライキが起きた。最大のストライキは三百人の労働者が三箇月にわたって仕事を放棄したフレデリックスタの製材工場のそれだった。翌一八九〇年には首都の帆布工場でもストライキが起きている。しかし多くは敗北に終わるだけだった。帆布工場のストライキについて、三月二日付の『社会民主主義者』紙は「昨日罷業同盟者たちは仕事を再開することを決めた。金銭の欠乏がそれを強いたのである」⁽⁴⁸⁾と書いた。

この状況は文学にも反映した。最初の労働者文学とされるペール・シヴレ(一八五七—一九〇四)の『ストライキ』が出たのは一八九一年である。シヴレは一八八一年のドラメンの製材所ストライキを経験していたが、このときは兵隊の発砲によって青年一人が死んだのだ。九一年には最初の革命的労働歌『ノルウェー社会主義者の歌』が編まれてもいる。編者は八七年から『社会民主主義者』の編集長を勤めているカール・イェッペセン(一八五八—一九三〇)で、従来のブルジョワ社会と労働者の共存を図るようなものではなく、新しい革命的な労働運動を推し進めるための歌であった。ここには労働階級の女性のための歌も含まれている。一八九五年には労働党の婦人部も結成された。

一八九四年には労働者の災害保険法も制定されるが、世紀末最大の政治問題は何と言っても、ノルウェーの外交自主権を認めないスウェーデンとの連合体制を解消しようとする動きであり、労働党は保守の「右派」にもリベラルの「左派」にも反対して、あえてスウェーデンとの戦いも辞さないタカ派の姿勢を示した⁽⁴⁹⁾。ともあれ、一八九八年、スウェーデンにもデンマークにも十数年さきかけて、二十五歳以上の男子の普通選挙制度が施行される。

もう一方の『ノルウェー女性』は月二回の発行だったが、これは一八八六年に廃刊となり、翌八七年にノルウェー女性解放同盟の機関誌として『新しい国々』が発刊される。女性運動の当面の課題は売春禁止と婦人参政権の問題であった。

ビョルンソンの戯曲『手袋』(一八八三)は、結婚前の女性に純潔を求めるなら男も同様に純潔でなければならぬと主張して無頼派の若ものから嘲笑を買っていた。しかしこの小市民的道徳観も圧倒的な男性中心社会における女性の権利を守るための一つの盾にはなった。一八八〇年頃のクリスチアニアには、公娼、私娼合わせると七百五十から千人の売春婦がいたという。十六歳から六十歳までの女性の人口は約四万人だったとされるから、その割合の多さに驚かされよう。そもそも当時は、三十代の女性の三分の一、男性の四分の一が未婚だった。一八九〇年代の初めに出た医師の報告には、男の四人中三人が遅かれ早かれ淋病にかかるが、その最大原因は売春婦にあると記されている⁽⁵⁰⁾。

前節で述べたように、八〇年代の多くの文学作品は若い世代の中で従来の性道徳観念が崩壊しているさまを描写した。だが、現実にはまだまだ性の問題は公にすることが許

されていなかった。ハンス・イエーゲルの『クリスチアニア・ボヘームから』には男が女にコンドームの説明をするところがあるが(ゴム製コンドームが作られたのは一八六〇年代のドイツ、イギリスであったという)、一八九〇年頃にドイツの医者フォン・ゲルゼンが書いた避妊にベッサリを使うことを教える本が出たとき、これを発禁にすべきかどうか議論が沸いた。議会ではわずかの差で避妊器具の広告、販売の禁止が可決される。その解禁は一九二〇年代まで待たねばならなかった。しかし、スウェーデンでは一九三八年まで許されなかったことからみると、早くからヴィーゲラの彫刻やムンクの絵が裸体男女の抱擁を臆することなく視覚化していたことが、ある意味でノルウェー国民を教育していたと言えるのかもしれない。

通常、ノルウェーの女性運動にとって十九世紀最後の十年間は反動期であったとされる。しかし、少なくとも、一八九〇年には十三人の女性作家の本が出版されているし、女性の参政権運動は九〇年代に大いに議論の的となった。最初の足場は一九〇一年の地方選挙の限定選挙権である。

この年、男子の地方普通選挙権が認められたが、成人女性の普通選挙権は地方が一九一〇年、国会が一九一三年に実

現する。これは世界の他のどの独立国よりも早いものである。

一八九八年、ノルウェー女性解放同盟の催したイブセンの七十歳の誕生祝賀会で、イブセンが自分は女性解放のために書いた覚えはなく、人間を描くことに専念してきただけだと述べたことは有名な逸話になっている。しかし、イブセンの意図はどうであれ、彼の作品とりわけ『人形の家』がノルウェーのみならず世界の女性解放運動に及ぼした力にははかり知れないものがある。そして今日の進んだ、あるいは複雑な女性問題の議論から振り返ってみれば、イブセンのこの点に関する意義は単に『人形の家』創作にとどまるものではないだろう。むしろ晩年の作品において、十九世紀後半のブルジョワ社会に支配的だったいわゆるヴィクトリア朝道徳、男と女で許される行動が異なるという二重道徳がすでに世紀末の家庭の中では無意味になってきていることを暴露してみせた、まさにそこにこそ本当の意義があるのではないだろうか。『小さなエイヨルフ』のリータや『ヨーン・ガブリエル・ボルクマン』のファニー・ヴァルトンは、この無意味さを如実に示している。

ノルウェーでは、結婚した女性が夫の保護下におかれ

て、法律上の権利を与えられなかったのは一八八八年まで
のことである。この年、妻も自己財産に対する権利が認め
られるようになる。『人形の家』のノーラのような状況は、
晩年作品ではもはや現実性をもたなくなっていた。そこで
は、最後作をのぞけば、お金をもつのはむしろ女の方であ
る。彼女らが男を支える。しかしそれによって、夫婦や家
族の関係が真実のものになるのではない。むしろ逆であっ
た。ここでもまた、「進歩」そのものに含まれる *progress* を
認めないわけにはゆかないのである。

イブセンもこの不安をはつきりと感じとっていたと私は
思う。ムンクが三十五年の年齢差にも拘らず、イブセンと
の共通性を強く感じていたそれが理由に違いない。だがイ
ブセンは若い作家たちのように伝統文化に救いを求めるこ
とはしなかった。彼はこの「進歩」をあたうかぎり推し進
めながら、その不安を超える方途を求めた。たとえそれ
が、ソルネスのように塔から墜落し、ボルクマンのように
冬山で凍死し、ルーベックのように雪崩に埋まる結果とな
ることは必然であるとしても、なお、後ろではなく前に向
かって進むのである。

帰国後のイブセンの生活は、伝説的な規則正しさをもつ

て営まれ、およそ政治や社会問題から超越しているように
世間の目に映っていた。その彼の手から生み出されるドラ
マにはかつてのリアリズムの枠におさまらない要素が多
く、人々はこの世界的な作家にただ儀礼的な賞賛の言葉を
差し出すほかなかった。しかしやがてこれら晩年作品の主
人公には自伝的色合いの濃いことが明らかとなり、作者の
深い内面からたちのぼる声に人々は圧倒される。だが、す
でに述べたように、そこにはまた明らかな現実社会の反映
があるという事実を過小評価すべきではないだろう。イブ
センの最終到達点はいたずらに個人的、主観的なものでは
なく、故国の変貌の根底にあるものを見通した上でのほと
んど絶望的な自己批判であったと言いうことができるのであ
る。

註

『イブセン生誕百年記念版全集』*Henrik Ibsens samlede ver-*
ker, Hudearsutgave は略号HUであらわす。

(1) 一八九一年六月六日付 Daniel Grønvald 宛手紙。HU,
Bd XVIII, s. 297.

(2) 一八九一年八月十一日付 August Lindberg 宛手紙。
HU, Bd XVIII, s. 300. ユムクトリブ・テラッセに實際

に入居したのは、十月二十一日で、7 Bからのきには3 Bに移った。このきんは、この四年近く住んだ。

- (3) Georg Brandes, *Henrik Ibsen* (Die Literatur, B. 32-33, Berlin, 1906).
- (4) HU, Bd XVIII, s. 367.
- (5) Michael Meyer, *Henrik Ibsen*, Vol. 3 (London: Rupert Hart-Davis, 1971), p. 197.
- (6) M. Meyer, *Henrik Ibsen*, Vol. 3, p. 206.
- (7) Bergliot Ibsen, *De irre*, Oslo: Gyldendal Norsk Forlag, 1948.
- (8) Francis Bull, "Hildur Andersen og Henrik Ibsen," *Edda*, Bd. LVII, 1957, Oslo: Aschehoug, 1957.
- (9) Øyvind Anker (ed.), *Henrik Ibsen. Brev 1845-1905. Ny Samling*, (Ibsenårbok 1979) (Oslo: Universitetsforlaget, 1979), s. 424.
- (10) 一八九三年一月廿日發ち十月二十一日世 Hildur Andersen 没命。 *Ibid.*, s. 394 & s. 401.
- (11) F. Bull, "Hildur —", *Edda*, 1957, s. 48.
- (12) M. Meyer, *Henrik Ibsen*, Vol. 3, p. 139-40.
- (13) HU, Bd XIX, s. 376-77.
- (14) J. W. McFarlane (ed.), *The Oxford Ibsen*, Vol. 1 (London: Oxford University Press, 1960), "Introduc-

tion," pp. 22ff.

- (15) M. Meyer, *Henrik Ibsen*, Vol. 1 (London: 1967), p. 192.
- (16) Hans Heiberg, *... født til kunstner: Et Ibsen-portrætt* (Oslo: Aschehoug, 1968), s. 106.
- (17) Magdalene Thoresen, *Brev, 1855-1901*, ed. J. Clausen & P. E. Rist (København: 1919), s. 240, quoted in M. Meyer, *Henrik Ibsen*, Vol. 3, p. 217.
- (18) Daniel Haakonsen, *Henrik Ibsen: Mennesket og kunstneren* (Oslo: Aschehoug, 1981), s. 276ff.
- (19) 1906年の雑誌「藝文」に「大木〇半の演説」の題がある。(Paa Turné, ed. Tore Hamsun, Oslo: 1960).
- (20) Nils M. Knutsen, *Hamsun* (Norsk forfattere i nærløys) (Oslo: Aschehoug, 1975), s. 14-15. 249°
- (21) 半島米の「演説」の題がある。Peter Jelavich, *Much and Theatrical Modernism: Politics, Playwriting, and Performance, 1890-1914*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1985, 249°
- (22) *Ibid.*, p. 28.
- (23) *Ibid.*, p. 35.
- (24) 「トマス・マン」の半島米の題がある。Max Nordau (*Entartung*, Berlin: 1893) 249° (「精

- 術と如何か』だが、ノルウェーでは『グンダ・ガムラ
ー』に対する新聞評は、ノンセンや「世紀末作家」として
なだめなめられた。(M. Meyer, *Henrik Ibsen*, Vol.
3, p. 157)°
- (15) Brian W. Downs, *Modern Norwegian Literature
1860-1918* (Cambridge: Cambridge University
Press, 1966), p. 94.
- (16) *Norges Kulturhistorie 5* (Oslo: Aschehoug, 1983
[1980]), s. 118.
- (17) Johs. A. Dale, *Litteratur og læsning omkring 1890*
(Oslo: Det Norske Samlaget, 1974), s. 116.
- (18) *Ibid.*, s. 7.
- (19) Willy Dahl, *Norges litteratur II: Tid og tekst 1884-
1935* (Oslo: Aschehoug, 1984), s. 80-81 & s. 114.
- (20) Jonas Lie (1833-1908) 一八七一年から一八七
八—一九〇五年の間ペンシ住み、その新ロマン派的短篇集
Tryld I (1891), *Tryld II* (1892) はノンセンの『棘藪
ノネン』(一八九二)の中のマロニエと繋がる°
- (21) W. Dahl, *Norges litteratur II*, s. 87.
- (22) Edvard Beyer, *Kinck* (Norsk forfattere i nærlys)
(Oslo: Aschehoug, 1976), s. 14.
- (23) Harald og Edvard Beyer *Norsk litteraturhistorie*
(Oslo: Aschehoug, 1970), s. 252.
- (24) ノルウェーの言語問題について、拙著『ノンセンの劇
作家史』(田園社、一九七四年)七三頁を参照°
- (25) Malcolm Bradbury & James McFarlane (ed.),
Modernism 1890-1930 (Harmondsworth, Middle-
sex: Penguin Books, 1976), p. 79.
- (26) 一八七四年から四十年に Georg Brandes 史詩集° HU, Bd
XVIII, s. 397-8.
- (27) N. M. Knutsen, *Hamsun*, s. 31.
- (28) 古くは Odde Brochmann, *Bygget i Norge*, Bd
2 (Oslo: Gyldendal Norsk Forlag, 1981), s. 95ff. 以下
参照°
- (29) *Norges Kulturhistorie 5*, s. 27.
- (30) *Ibid.*, s. 48.
- (31) M. Meyer, *Henrik Ibsen*, Vol. 3, p. 198 & p. 300.
- (32) *Norges Kulturhistorie 5*, s. 26.
- (33) 古くは Norman Stone, *Europe Trans-
formed 1879-1919* (Fontana History of Europe)
(London: Fontana, 1984) 以下参照°
- (34) P. Jelavich, *Munich and —*, p. 44.
- (35) 一八七〇年代ノンセンのリンシミンチアラーヤを中心とし
た劇作家史について、カール・H・ニコムスキー著『神楽

末ヴァーン』(Carl E. Schorske, *Fin-de-siècle Vienna: Politics and Culture*, New York: Knopf, 1980)の中に、次のような記述がある。

上昇していく新しい金持ちも、下降して産業労働者軍に這入っていく職人たちも、在来の住居形式——それは一戸構えであれ多数戸構えであれ、主人にも従業員にも生活の場であるとともに仕事場でもあった——を守らなかつた。十九世紀の都市生活は徐々に生活と労働とを、住居と店舗あるいはオフィスとを、分離したが、アパートメント建築はこの変化を反映していた。(安井琢磨訳、岩波書店、一九八三年、七〇頁。)

(46) N. Stone, *Europe Transformed*, pp. 34-5.

(47) 一八八五年六月十四日、トロンヘイムにおける労働者による歓迎集会での演説。HU, Bd XVIII, s. 000.

(48) J. A. Dale, *Literatur og ...*, s. 74.

(49) この小説は一般にも批評家にも評価されず、シウヴン自身も一九〇四年に自殺する。しかし、彼の作品の方が新ロマン派より時代を代表してゐる。W. Dahl は *Norges litteratur II*, s. 196ff.)。

(50) 一八九二年の総選挙で「左派」は大勝利をおさめ、党首ステーンの政府は議会の過半数を制した勢いで、外交権の確立、普通選挙の施行、直接税の実施などをかかげたが、

いずれも、スウェーデンに対する力不足で、達成できなかった。特に、スウェーデンとの連合問題で、スウェーデン側が国全体で一体となって対抗してきたのに対し、ノルウェー側は、足並みがそろわず、「左派」内部でさえ疑問をもつむきがあったからである。九二年には国王は少数派の右派に組閣を委ねたが、九四年の選挙で再び「左派」が多数を占め、政権を握った。しかし、連合問題はスウェーデンとの協議なしに扱わないことを確約させられた。翌九五年五月十一日が、二国間の協定の期限切れであったが、ノルウェー側は、スウェーデンとの軍事行動を起こしてまで完全自主をめざすか、それとも主張の後退を選ぶかを迫られた。秋には右派から首班が出る連立内閣が成立し、戦争をあえて辞さないとする労働党の態度をしりぞけて、連合問題解決を避けた。(Magnus Jensen, *Norges Historie: Unionsiden 1814-1905*, Oslo: Universitetsforlaget, 1963, s. 185ff. を参照。)

(51) Øystein Sørensen, *1880 årene: Ti år som rystet Norge* (Oslo: Universitetsforlaget, 1984), s. 28ff. 及び *Norges Kulturhistorie 5*, s. 123f. を参照。

* 本論文は一九八八年度成城大学特別研究助成費による研究成果の一部である。